

千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会報告書

市民が考え・発信する千里ニュータウンの再生ビジョン
- 生活者の視点から -

平成14年(2002年)12月25日

千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会

はじめに

平成13年(2001年)3月31日、吹田市からの呼びかけに応えた73名の公募市民で構成される「千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会」が発足しました。

まちびらきから40年を経過した千里ニュータウンは、時の流れとともに様々な課題を抱え、21世紀型の新たなニュータウンのあり方を問い直す機会に直面しています。

私たち、千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会の委員は、今、まさに動き始めようとしている千里ニュータウンの新たなまちづくりのための多くのプロジェクトにおいて、生活者の視点からのまちづくりコンセプトを提起すべく、様々な観点からの議論を続けてきました。

委員会では、「環境」「少子高齢化」「文化・コミュニティ活動」「コミュニティ支援施設」「住宅・交通」の大きく5つの分野に分類したグループを構成し、それぞれのグループ内で生活者の視点に立った活発な意見交換を繰り返すとともに、委員会全体での意見調整を積極的に進め、その結果をこの報告書にまとめました。各グループごとの報告では、それぞれに問題点の整理やまとめ方に特色が出ており、そのまま掲載しました。

千里ニュータウンを取り巻く種々の状況は、今もその変化の速度を速めて進行しているものも多く、早急な対応措置が必要です。

私たち委員は、この委員会をきっかけとして、市民が市政に参画しようとする意識の高まりや、千里ニュータウンを軸にした新たなコミュニティづくりへのうねりが生まれ、今後の千里ニュータウンの活性化に大きな夢を与えてくれたと確信しています。

この報告書が、これからの千里ニュータウンのまちづくりの大きな指標となり、様々なまちづくりの施策に生かされることを委員一同切に望みます。

平成14年(2002年)12月25日

総論 1

- ・ 新しい日本のまちづくりの顔として
- ・ 住むものを魅了しつづける住環境
- ・ すべてのひとが便利で安心して暮らせるまち
- ・ 活力のある地域コミュニティづくり
- ・ 賑わいのある近隣センター
- ・ 医療施設の質的向上
- ・ 豊かな生活と若者を呼び戻す住宅建替え
- ・ 豊かに成熟したまちにふさわしい文化の創造と発信
- ・ 新たな時代の先進都市をめざして！

第1グループ（環境） 5

- まえがき 5
 - ・ 緑の保全と育成 5
 - ・ 大気汚染や騒音等の公害の防止 5
 - ・ 犯罪や迷惑行為の予防 6
 - ・ ゴミ問題、省エネルギー対策 6
 - ・ 千里ニュータウンの町名に『千里』をつける 6
- まとめ - 千里ニュータウンを含む広域行政への道筋 - ... 6

第2グループ（少子・高齢化） 7

- まえがき 7
 - ・ 高齢者のために 8
 - 1. 高齢者の生き甲斐づくり
 - (1) 高齢者の能力を活用するプランと場の作成

- (2) 「される側」から「する側」に
 - 2. 独居高齢者への働きかけ
 - 3. 高齢者の知恵の活用
-
- . 少子化について 8
 - 1. 未来に希望がもてる環境づくり
 - 2. 世代を超えた交流
 - 3. 住民の意識改革
-
- . 少子・高齢化の中で施設や設備はどうあるべきか 10
 - 1. 遊休施設の開放と活用
 - (1) 学校の空き教室の有効活用
 - (2) 近隣センターの空き店舗利用
 - 2. 新しいコミュニティーサービス
 - (1) 配食サービスの事業化
 - (2) 子育てサポートセンター
 - (3) 児童館又は児童館的施設の新設
 - (4) 高齢者向けの福祉食堂
 - 3. 千里ニュータウンにふさわしい未来型の住居
 - (1) 広くて住みやすい三世帯住宅
 - (2) 高齢者に優しい高層住宅
 - (3) 若年世代のための住居
 - (4) 公営住宅のペア入居
-
- . 少子・高齢化対策を進めるための人材育成について 12
 - 1. 既存の組織と新しく求められる人材
 - 2. 新しい活躍の分野
 - (1) 近隣センター
 - (2) 高齢者
 - (3) 若者に魅力的なまちづくり
 - (4) 子育て支援
 - (5) 時代に即応した図書館の充実
 - (6) 健康管理のために
 - 3. 人材育成をどのように取り組めば良いか
-

第3グループ（文化・コミュニティ活動） …… 14

まえがき	14
. コミュニティに対する千里の住民意識	14
. 人と人との交流	15
1. 子どもと地域	
2. 若者と地域	
3. 高齢者と地域	
4. 障害者と地域	
5. 生涯学習と地域	
. イベントの現状と新しいイベントの創造	15
. 文化的環境の確立	16
. 自治会活動の展望	16
. 各種団体の活動	16
. 住民意識の高揚とまちづくりへの住民参加	17
. 夢のあるまちづくりへ	17
まとめ	17

第4グループ（コミュニティ支援施設） …… 19

まえがき	19
1. 千里ニュータウンの地域施設構成	
2. 近隣センター・地区センターが抱える問題点	
3. 地域施設からみた千里ニュータウンの活性化	
. 近隣センターの活性化	20
1. 近隣センターの必要性	
2. 近隣センターの活性化の方向	

3．近隣センターの活性化のための方策

- (1) 近隣センターの活性化
- (2) 少子化に対応した活性化
- (3) 住民の高齢化に対応した活性化

4．医療センターなどの充実

- (1) 医療センター充実の必要性
- (2) 医療センターの充実

5．大規模災害への備え

- (1) 大規模災害（大地震、大型台風の直撃など）への備えの必要性
- (2) 食料など緊急生活物資の備え
- (3) 緊急医療への備え
- (4) 近隣センター周辺を一体とした避難・生活維持態勢

．地区センターの活性化、再開発 23

1．北地区センターの充実

2．南地区センターの活性化、再開発

- (1) 南地区センターの立地の利点
- (2) 再開発に関する情報開示と市民参加の推進
- (3) 南地区センターの整備の方策
- (4) 大規模災害への備え

第5グループ（住宅・交通） 26

まえがき 26

．住宅問題 27

- 1．住宅の理念
- 2．人口構成とコミュニティ
- 3．住宅供給のニューモデル
- 4．建築物（建ぺい率、容積率、建物の高さ）
- 5．土地利用
- 6．住環境
- 7．住宅と交通の係わり

．交通問題 31

- 1．交通の理念
- 2．公共交通（バス）
 - (1) 現状バス路線の問題点

(2) 福祉バス等に関する新たな提言

3 . 自動車交通

(1) 通過交通問題

(2) 駐車・駐輪場問題

4 . 歩行者交通

. 今後の方針 - 千里ニュータウン再生実現への戦略 - . . . 35



= 総論 =

新しい日本のまちづくりの顔として

千里ニュータウンは、昭和30年代に始まった急速な経済成長による、都市部への人口集中に伴う住宅不足に対応するため、開発面積11.6km²、計画人口15万人に及ぶ大阪都心部から10km圏の位置に大阪府が手掛けた日本で最初の大規模ニュータウンであり、日本のニュータウン政策の礎として今日でも各方面からの高い評価と注目を集めています。

計画的に造られたまちは、社会の変化に対する対応が難しく、適切な対応策を施さなければ衰退すると言われており、現在の千里ニュータウンは、まさにそのような様相を呈している感があります。

住むものを魅了しつづける住環境

昭和37年(1962年)のまちびらき当時の千里ニュータウンは、それまで一面の竹林地帯であった千里丘陵の面影もない、荒涼とした裸の造成地と化していました。

しかしながら、40年を経た今日にあっては、市民や行政などが一体となって取り組んできたまちづくりが実を結び、潤いのある緑豊かな住宅都市として全国から高い評価を受けています。

このまちの豊かな緑は、千里に住み続けるものにとって、また、周辺地域に住む人々にとっての貴重な共有財産であり、その維持と保全は、千里ニュータウンでのまちづくり全ての部分における基本理念と位置づけられます。

一方、千里ニュータウンの北部など、周辺地域の開発が進み、通過車両の生活道路への流入が増えており、さらに国際文化公園都市(彩都)などが加わり、通過車両や駅利用のための車両の流入量の増加など、様々な住環境の更なる悪化が懸念されるため、これらを未然に防ぐための適切な施策の実施が急がれるところで

すべてのひとが便利で安心して暮らせるまち

千里ニュータウンの誕生した背景にもあるように、当時、千里ニュータウンに新たに入居した住民の大多数は、日本の高度経済成長の原動力の中心的存在であった20歳代後半から40歳代前半に集中していました。しかしながら、良好な生活環境が整っていった反面、手狭な住宅が多いという状況下においては、高齢者層の定住志向と若者の流出という現象を招き、高齢化と少子化を急速に推し進める形となりました。

いま、千里の抱える大きな課題の一つである少子高齢化への対応を図るためには、千里ニュータウンにおける住宅全体の約85%にも及ぶ集合住宅の再生事業

などをとおして、いびつに変化した年齢構成の適正化や新たな地域コミュニティ形成などに取り組む必要があると考えられます。

高齢者や子育て期の若い世代にとっても暮らしやすい、活力のあるまちづくりのために、高齢者の持つ多様な経験とノウハウを活かしたまちづくりを進め、世代を超えた交流の機会や様々なコミュニティサービスの展開、また地域を育てる人材の育成といった少子高齢化への対応のノウハウを備えた理想のまちの実現が望まれます。また、コミュニティバスや隣接都市及びニュータウン内を結ぶバス路線の充実を図ることが求められます。

活力のある地域コミュニティづくり

これまでの日本の生活風景として一般的であった井戸端会議の光景は、近年あまりその姿を目にすることがなくなったように思われ、千里ニュータウンでも、近隣住民との交流を望もうとしない独特のライフスタイルの浸透により、自治会への加入率の低下を招いている地域もあります。

成熟期に至るまでの千里ニュータウンでは、保育園や幼稚園などの公共施設の建設などを求めて地域団体や自治会が活発な活動を展開し、子ども会活動やスポーツ振興などの仲間づくりや組織づくりも活発でした。

今、千里ニュータウンの活性化を考えるための大きな柱は、これら地域コミュニティの活性化にあるのではないのでしょうか。

従来型の地域組織に加え、地域に根ざした特色ある活動を展開するNPO組織の誕生やこれらの組織が主体的に取り組むコミュニティビジネスの誕生が期待されます。また、近隣の大学とも協働しながらコミュニティづくりを進める必要があります。

賑わいのある近隣センター

商業機能として各住区に配置された近隣センターは、住民の高齢化や一世帯あたりの構成人数の減少や周辺地域の大型スーパーなどの進出による大きな影響を受けてきました。

また、一業種一店舗という業態が、価格競争の原理が排除された“千里物価”や品揃え不足を生み出し、近隣センターの衰退に拍車をかけました。

しかし、遠方に出かけることの困難な方々にとっては、生鮮食料品など日用品の購入ができる近隣センターを望む声があることも確かです。

近隣センターが、これからも住民の日常生活に貢献できるよう機能再編を行い、様々な機能の相乗効果による人の集まるセンターを目指し、各住区ごとに特色のある近隣センターを演出することが期待されます。

医療施設の質的向上

もう一つの各住区に配置された機能で、千里ニュータウンの特徴となっているものに医療センター機能があげられます。

一方では住民の医療機能拡充の需要にこたえる形で、北千里や桃山台といった駅周辺に診療所が集積するビルが出現し始めていますが、ニュータウン建設当初より住民の健康に貢献してきた医療センターも、住民の少子高齢化に伴い機能縮小が顕著に表れています。しかし、気軽に受診できるかかりつけの医者の存在は安心できる暮らしにとって重要であり、家庭医の存在を見直す必要があります。

豊かな生活と若者を呼び戻す住宅建替え

これら千里ニュータウンにおける様々な課題の解消に大きな影響を及ぼすのが、住宅問題です。

建築から40年の経過で老朽化が目立つうえ、手狭な間取りの集合住宅の建替えは、千里ニュータウンのこれまでの光景を一変させる一大事業となることが容易に想像できるもので、これらの事業に対しては、市民と行政が連携協力した積極的な取り組みが必要と考えます。

敷地に余裕をもって建設されている現行の集合住宅の建替えに際しては、緑の確保や自然環境への配慮及び近隣の低層住宅地との共存環境などにおいて様々な対応が行われなければなりません。

また、この集合住宅の建替えは、若者層の需要に応えることのできる多くの住宅供給が行える絶好の機会になるとともに、バリアフリー化による高齢者や障害者への対応が図られるべきことはいうまでもないことです。

若者層の入居促進や二世帯共生住宅の確保により、千里ニュータウンの当初計画人口の達成や少子化の解消などが期待されます。

しかし、現行の公営住宅関連の法令がその障壁となることも考えられるため、「千里ニュータウン再生法」ともいうべき法令の整備が期待されるところです。

豊かに成熟したまちにふさわしい文化の創造と発信

千里ニュータウンの40年のまちの歴史と佇まいは、豊かに成熟したまちの輝きを放ち、歴史と風格に満ちあふれた古いまちとは少し異なった独特の文化を育んできました。

この独特の文化を更に発展させ、新たな千里文化の創造に向けた様々な文化活動を積極的に展開するとともに、千里文化を全国に向けて発信して行かなければなりません。

新たな時代の先進都市をめざして！

新たな時代の千里ニュータウンの幕開けは、そこに住むもの自らがまちに愛着をもち、自らが積極的に行動することから始まります。

行政と住民が互いに切磋琢磨し、共通した再生のための構想をもって着実に一歩ずつ歩いて行くことにより、千里ニュータウンが再び日本の先進都市として歩み続けることとなります。

その実現に向けて、吹田市・豊中市が一体となって関連機関と連携し、地域の管理・運営に対して住民が主体的に参画できる組織形成を行うことが必要です。

第1グループ（環境）

まえがき

都市の豊かな緑と大きな樹木はその地域の歴史と風格を表しています。まちの緑と草花は「我がまちをきれいな潤いのあるまちにしたい」という生活者の気持ちの表われで、長年に亘る努力の賜物です。

千里ニュータウンの最大の財産は40年間積み上げてきたこの豊かな緑であり、樹木は一朝一夕には育ちません。美しく清潔な魅力あるまちには人が集まり繁栄します。

しかしながら、周辺地域の開発が進むにつれて、通過車両が増加し、生活道路にまで及び、生活の安全が脅かされ、住環境の悪化を招いています。また、ゴミのポイ捨てや不法投棄が目立つようになりました。

他の地域と比べて安心して住める街であった千里ニュータウンも犯罪や迷惑行為が増加しています。

千里ニュータウンの開発理念であった「ゆとりある緑豊かで良好な住環境」を基礎に“緑豊かで、みんなが安心して、いつまでも住みたくなる環境のまち”を目指して、生活者の視点から千里ニュータウンの再生に向けてつぎのとおり提言します。

・緑の保全と育成

公園、緑地は減らさず、敷地の緑被率の向上を図り、新たな緑化や修景を推進する。また、公園内の池は親水化する。

街路樹は常緑樹と落葉樹を配植することにより1年を通じて緑を確保し、不必要な枝切りをしない。道路舗装には透水タイプを採用し、路盤下に雨水を確保し街路樹を守る。

・大気汚染や騒音等の公害の防止

千里3号線を東に延伸して山田上 - 小野原線に接続する新設道路の整備が急務であり、災害時の救援道路としても重要である。

生活道路の舗装の更新を透水タイプで急ぎ、タイヤの摩耗粉塵と騒音を軽減する。

千里ニュータウン内に乗入れている路線バス、スクールバス、巡回・送迎バス、ゴミ収集車等の低公害車化を推進する。

騒音を撒き散らす暴走車両の取り締まりを強化する。

千里ニュータウンやその周辺に立地する遺伝子組換え等を実施する研究施設等と安全協定を締結し、第三者によりそれらの施設を十分監視する。

水質保全のために生活排水の水路への流入を防ぐ。

・犯罪や迷惑行為の予防

夜間の防犯のために住区内の街路灯の照度を上げる。
門灯や玄関灯の明るさを確保するように協力し、まち全体を明るくする。
制服警察官の配置や、パトロールを増やす。

・ゴミ問題、省エネルギー対策

ゴミの減量や分別、生ゴミの水分を減らして出すことによるゴミ処理費の節減効果とそれによって確保できた資金が何に生かされたかを住民に周知することにより、更なる住民の協力を得る。

廃棄物減量等推進員による啓発活動を活発にし、学校、職場、地域でゴミ拾いを経験させ、ポイ捨てや不法投棄を抑止する。

住民自身も住居周辺をきれいに保ち、町内の美化に協力する。

千里ニュータウン内の公共施設の屋上にソーラー発電設備を設置して、クリーンエネルギー化推進のモデルとする。

・千里ニュータウンの町名に『千里』をつける

全国的に知名度の高い千里ニュータウンでありながら、吹田市域では町名に『千里』を冠していない。町名を『千里 台』に変えることにより、吹田市域の千里ニュータウンの知名度を上げて活性化に繋げる必要がある。

まとめ - 千里ニュータウンを含む広域行政への道筋 -

地域で何かを変えようとするときは必ず住民が参加し、住民との協働で進めることを盛り込んだ『まちづくり条例』を制定した上で、つぎの方策を順次実施する。

吹田市域のニュータウンにおける『まちづくり協議会』を組織する。

千里ニュータウン全体を管理・運営する住民も参加した『住民協議会』を吹田・豊中両市と大阪府が早期に設立する。

千里ニュータウンを核として吹田・豊中・箕面・茨木市が一体的に行政を運営する。

第2グループ（少子・高齢化）

まえがき

千里ニュータウンが活性化を失った最大の原因は「少子・高齢化」にあります。

千里ニュータウンで最初の入居が始まったのは今から40年前（昭和37年）佐竹台でのことです。以後年々人口は増加しましたが、昭和50年の12万9千人（豊中市を含む）をピークに減少に転じ、平成13年末では9万5千人を割り込んでいる状態です。

しかも、高齢化率は大阪府平均をはるかに上回り、独居老人の数は鰻登りに増えました。反対に、14歳以下の若年層の割合は平均値より大きく低下しています。更に、千里ニュータウンオープン当初62%を占めていた夫婦と未婚の子ども世帯は、今では30%を切っています。

千里ニュータウン発足当初考えられていた理想的な街の構造は、高度成長による住民の価値観の変化によって、いやおうなしに変貌させられました。核家族化、三世同居家庭の減少、若者の千里ニュータウン離れ、そして加速される少子・高齢化問題でした。

これは我が国の一般的な風潮であったとはいえ、歴史の浅い千里ニュータウンではその影響が様々な形で波及して行きました。従って、少子・高齢化問題の解決抜きに、千里ニュータウンの再生を考えることはできません。

しかし、理想の住都「千里」をステータスと考え、誇りをもって住まいとしてきた私たちにとって、時代の変化によって千里がどのように活性化を失おうとも、この街に対する愛着と誇りを捨て去ることはできません。

だから、私たちは心から願っているのです。日本で最初の価値あるニュータウン千里は、少子・高齢化対策でも、日本で最高のノウハウを兼ね備えた理想の街でなければならないということを……。しかも、そうした情報を全国へ発信する、かけがえのない基地でなければならないということを……。

それは、「少子・高齢化」をマイナス要因としてのみ捉えるのではなく、少子であり高齢化であればこそ、他の街に類を見ない住民本位の、暖かみのある、それでいて活気のある街を、創り出すことにはほかなりません。

高齢者が生き甲斐を感じて住める街、若い夫婦が安心して子育てのできる街、それはまた、あらゆる年代層、あらゆる分野の人たちにも夢と希望と満足感を与えるものでなければなりません。

21世紀、人が千里に住みたくなる要素は何か、もう一度根底から洗い直すことです。

・高齢者のために

1. 高齢者の生き甲斐づくり

(1) 高齢者の能力を活用するプランと場の作成

高齢者が生き甲斐を持てる仕事やボランティアを提供し、積極的に参加を促します。例えば、IT関連などの経験者が集まって、そこから新しい仕事を創出して行きます。

(2) 「される側」から「する側」に

高齢者も住民の一人として「世話をする側」に参加してもらいます。

独居高齢者の昼食会や配食サービスなどで、従来の「される側」から「する側」に立場を替えて、高齢者に生き甲斐を見出してもらいます。

2. 独居高齢者への働きかけ

社会に背を向け、近隣と隔絶する高齢者(特に男性)に、目を外へ向けるよう働きかけ、地域社会との係わりを理解してもらうよう努力します。

趣味や娯楽の仲間に誘いだし、生き甲斐を見つけ出していただきます。

独居高齢者の情報の把握と交流を図り、孤独死を防ぐ手立てとします。

3. 高齢者の知恵の活用

子どもたちと遊びを通して知恵の交流を図ります。核家族化した子どもたちには基本的な生活の知恵が欠けています。例えば鉛筆を正しく持てない。ナイフで鉛筆を削れない。靴の紐を結べない。卵が割れない。タオルが絞れない。箸が持てない。これでは日本特有の文化が壊滅します。今こそ高齢者の経験と知恵が必要なときです。

子どもたちに古くから日本に伝わる遊びを教えます。昔の子どもは遊びを作る名人であり、創意工夫がありました。今は与えられたものでしか遊ばません。知恵不足を補うのは高齢者の義務です。

社会生活の常識や公德心を教えます。今ほど、他人への思いやりや、他人の痛みを自分の痛みと感ずる心に欠ける時代はありません。善悪のけじめがない。感謝の心が無い。正義感がない。全て家庭内でのしつけ不足からくるモラルの低下が原因です。

日本の将来を見据えて、高齢者の経験と心が子どもたちを甦らせるのです。

今は親が子どもを教えたり叱ったりできない時代です。その欠点を埋めるのが高齢者の務めです。町内の子どもを親以外の他人が、みんなで叱ったり導いたりしながら育成する、コミュニケーション作りが何よりも大切。高齢者の出番は多いと思います。

・少子化について

1. 未来に希望がもてる環境づくり

核家族化が進んだ時代を子どもとして歩んできた現在の子育て世代は、その時代の経済、社会全体の成長に後押しされ、住環境(マイホーム、子ども部屋)

や教育（習い事、学習塾）や遊び（マスメディアの普及、多種多彩のおもちゃ）等の面で、「ものの豊かさの中で育ってきた世代」です。

現在は、社会全体の状況が厳しく将来へ大きな課題（つけ）を認識せざるを得ない時代となり、その中で、「将来を託さなければならない子どもたちを産み育てていかなければならない」ことは、「結婚や子育てに夢をもてるだろうか？」と不安にならざるを得ないのではないのでしょうか。「もの」の時代から「情報」の時代へ社会は変わり、現在の子育て世代は、比較的「情報」を吸収しやすい世代です。その反面、「情報」の氾濫によって振りまわされ、不安を増大させ孤立していないのでしょうか。また、親の不安が子どもの成長に良くない影響を及ぼしていないのでしょうか。

子育てに関する様々な情報を交換でき、他人と一緒に考えることができる人間形成を養う環境をつくれます。

- ・ 情報を整理し、情報だけの固定観念をなくすこと。
- ・ 子育て世代のグループ間交流を増やし、様々なグループが共有できる情報交換の場（インターネットの仮想広場や井戸端会議的な集会所等）を設けること。
- ・ 協調性を基本とした社会マナー的なルールをつくること。

「仕事と子育て」、「家事と子育て」、「余暇と子育て」等における心の豊かさをもてるように、サービス、支援策、施設等の環境を整備、充実させます。

- ・ 子育てに関して、父親、母親の区別（役割分担）をなくしていくこと。
- ・ 子育て支援活動に地域通貨制度を導入すること。
- ・ 非営利活動への企業の積極的な参加を促すこと。
- ・ 行政管理の施設を利用した子育て支援を提供する拠点をつくること。
- ・ 子育て支援活動に対する行政施策（教育、児童福祉等）の充実を働きかけること。

安心して子どもたちが集え、子ども同士で縦の関係が形成できる環境を整備します。

- ・ 子ども会の活性化と更なる発展を促すこと。
- ・ 遊び場としての学校運動場の利便性を増すこと。

2. 世代を超えた交流

教育機関をはじめ様々な諸団体において、高齢者と子どもたちとの交流が催されています。しかし、親世代と祖父母世代との交流は少なく、祖父母から両親への生活ノウハウの引き継ぎは少なくなっています。それぞれが、「時代遅れ」、「現代には合わない」、「昔は良かった」など、個人意識や価値観の相違で人間関係をぎくしゃくさせていないのでしょうか。そして、無関心さによって活力を失ってきたのではないのでしょうか。

誤解や思い込みを、交流することにより無くしていきましょう。

世代間意識（価値観）の相違を理解し合える人間関係を形成していきま

よう。

子育ては「経験を活かす」ことが大切であり、一人で抱え込んでしまうものではありません。そのノウハウをもっている人生の先輩方に積極的に教えていただきましょう。

情報化時代のノウハウを高齢者に教えていきましょう。

- ・ 高齢者の関連団体と子育て世代のグループとが、相互に情報をやりとりできる「世代間交流会」を行事化すること。

3. 住民の意識改革

少子化の進行は、高齢化率を加速させることになります。また、将来、自分自身も高齢者の仲間入りをする事になり、その時代を担うのは現在の子どもたちです。千里ニュータウンの活性力が低下してきた課題を先送りしないように、子どもたちだけにその解決を担わせないためにも、「千里ニュータウン」は「希望をもって子育てができる街」、「子どもたちが生き生き育つ街」にしましょう。

住民一人一人に問題意識（危機感）をもってもらい、「自ら解決し、これからの千里ニュータウンの中心的世代は我々だ」という意識のもと、積極的に協働しましょう。

地域には自治会関連、教育関連、商店街関連、福祉関連等、様々な団体が活動しており、- 1, 2の環境づくりや交流が実践されています。それらを活用できるような新しいリーダーの育成が強く望まれます。

- ・ サービスを受けるだけでなく、自ら解決していく意識をもたせる活動を行うこと。
- ・ 地域の各種団体が交流できる組織、ネットワークをつくること。

・ 少子・高齢化の中で施設や設備はどうあるべきか

1. 遊休施設の開放と活用

(1) 学校の空き教室の有効活用

これだけ少子化が浸透すれば、一校区当りの児童数が減少し、千里ニュータウン内の各校とも空き教室が増加しています。その空き教室を使って、- 3 - に記述した高齢者と子どもの「知恵と遊びの教室」や「躰教室」を開きます。高齢者の生き甲斐は高まり、子どもたちに欠けているものは充足されます。ところが、学校現場では空き教室を物置に使いながら、空いている教室は一切ないといえます。将来の小人数学級への移行に備えて、開放しないという行政側の差し金働いているとすれば、一考が必要です。

(2) 近隣センターの空き店舗利用

各地区の近隣センターは時代の流れとともに取り残され、活性化を失い、歯の抜けたように空き店舗が目立ちます。この空き店舗を行政が借り受け、地域のサポートセンターとして活用します。今、高齢者や若夫婦が最も望んでいる施設は、気軽に集い語れる喫茶室兼情報交換の場です。高齢者にとっ

ては友人知人の増加に、若い親にとっては子育て支援や育児相談に、安心して集える場所として是非活用したいものです。

また、ミニディサービスや配食サービス、託児所や児童館的な施設としても利用できます。これらは近隣センターの活性化にもつながるはずです。

2. 新しいコミュニティサービス

(1) 配食サービスの事業化

今、高齢者向けの配食サービスは受給希望者が多すぎてパンク状態にあります。これからのこうしたサービスは、単にボランティアに頼るのではなく、事業化による安定的なサービスを考える必要があります。そのためには台風や災害時にも機能する厨房施設を整え対処することが肝要です。

(2) 子育てサポートセンター

コミュニティサービスの一環として子育てサポートセンターをつくり、若い親に子育てのノウハウを提供し、虐待等の原因とも言われるストレス解消の手助けや相談を受けることが求められています。

(3) 児童館又は児童館的施設の新設

千里ニュータウンに少ないものに児童館があります。子どもたちの健全な育成にはせめて各小学校区に一つの児童館が必要ですが、それが無理なら児童館的なものを他の施設に併設することです。

(4) 高齢者向けの福祉食堂

配食を受ける資格もなく、どうにか歩けても食事を作れない人のために、老人向けの安くてゆったりした福祉食堂をつくります。世間話を交わしながら、人と人との触れ合いを楽しむ場所づくりが、生き甲斐を生み出すものになります。

これらの施設はいずれも住区の中心にある近隣センターか市民ホールの一部を活用することが望まれます。

3. 千里ニュータウンにふさわしい未来型の住居

(1) 広くて住みやすい三世帯住宅

21世紀、今後ますます少子・高齢化が進み、人口の減少が予想される以上、三世帯の家族がプライバシーを守りながら同居できる、ある程度広さのある住宅が不可欠です。

(2) 高齢者に優しい高層住宅

医療設備が整っていて、リハビリや高齢者ケアができ、配食サービスなども兼備した、高齢者や障害者に優しい高層集合住宅の建設や現在の公的集合住宅の改造が必要です。

(3) 若年世代のための住居

若年世代夫婦の入居を促進するため、安価な賃貸住宅を増やします。

安心して出産育児ができるよう生活費の低廉化を行政が積極的にサポートすることが大切です。

(4) 公営住宅のペア入居

両親の近くの住棟に子ども家族を割安で入居できるよう目指します。

・ 少子・高齢化対策を進めるための人材育成について

1. 既存の組織と新しく求められる人材

(1) 地域の組織役員の高齢化

人材は、どんどん入れ替わっていく必要があります。それだけでなく、魅力ある街を構築できません。自発的にやる気のある方達が、多くのグループを発足していくことが望ましいと思われます。そこでは、人間関係をスムーズにすることができるような、リーダー的な役割がはたせる人材が必要になってきます。また、多くの情報を身に付けることは不可能に近いため、リーダーがパソコンなどの情報機器を使えることが必要です。

2. 新しい活躍の分野

(1) 近隣センター

近隣センターの空き店舗利用のなかで、多目的なコミュニティサービスを提供できる場所と、そこで活躍して頂く、経験豊富な女性が求められるでしょう。若者の育児相談から、高齢者のサポート相談、いろいろな住民の諸問題まで、相談できる人材が必要です。

(2) 高齢者

各住区にたくさんの配食ボランティアの人材が必要になってきます。

リーダーは常に新鮮な感性を持続するためにも、専門的な学習を年一回は受講できるシステムを創ってはいかがでしょうか。

(3) 若者にも魅力的なまちづくり

高齢者にもインターネットを普及させ、情報のやり取りで、バーチャルな世界と顔の見える現実の世界とを頻繁に行き来でき、体験できる楽しいまちづくりが大切です。そうすれば、若者との交流が進み、若者が住みたくなり、自分達のまちという意識が芽生え、魅力あるまちになるでしょう。人材も集まります。魅力的なまちに生まれ変わることでしょう。

(4) 子育て支援

地域サポートセンターの充実。子育てアドバイザーと施設が必要です。

高齢者と子どもの「知恵と遊びの教室」や「躰教室」を開くための、人材の発掘とリスト作成。

(5) 時代に即応した図書館の充実

時代の変化に応じた書籍をおき、図書館自体を充実させる必要があります。

小中学校の図書館には、司書の資格をもった高齢者をボランティア的に配置してはいかがでしょうか。

(6) 健康管理のために

予防医学の面から、高齢者は、全員が何らかのかたちで、運動をする機会がもてるようなシステムがあればよいと思われます。

そのためには、運動と学習とをセットで教えられる経験豊富なアドバイザーが必要です。

3. 人材育成をどのように取り組めば良いか

従来から取り組んでこられた、自治会、各種団体などのベテランのリーダーは、この40周年を機に、現状の諸問題は継続しながらも新しい人材を育てる側に立って考えてほしいものです。大変なご苦勞をかけますが、課題を未来への期待に込めて、協力をよろしくお願いします。

第3グループ（文化・コミュニティ活動）

まえがき

「すべての人が心豊かに住めるまち、人と人とのきずなを大切にするまち、文化を育む創造性豊かなまち」を目指します。

そのためには、コミュニティ活動の推進と充実がより重要であり、コミュニティの構築を図る事が、千里ニュータウンの再生および活性化の中軸であると思います。

．コミュニティに対する千里の住民意識

千里は新しく作られた街なので、地方の様な縁側交流や、旧来の井戸端会議のようなものが全くなく、近隣において人と人との交流が出来にくい構造になっています。特に集合住宅においては鉄の扉に閉ざされた、いわゆる「団地族」と呼ばれる独特の文化が生まれてきました。

この鉄の扉を開放し、近隣の人々がお互いに心を開き、交流しあう事で信頼感を深め、地域の連帯感をも育む事となり、新しい千里のまちづくりに繋がるものと思います。

近隣との交流を望まない人が多い。

特に集合住宅においては、プライバシーを主張するあまり、人と関わる事を好まない人が多いように思う。自治会組織率も低く、特に公団住宅においては平均50%以下の状況の地域もあります。

人の世話をする人（地域役員やボランティア等）が他の地域より極端に少なく、世話をする人と、世話をしたくない人とのギャップが著しい。

千里を「ふる里」と思える住民意識が低く、子どもたちが成長しても千里に留まらず、他の都市へ移ってしまう。

このような状況の中で、文化・コミュニティ（人と人との交流、人と地域との交流）は、一人の人を大切にする民主的な活動でなければなりません。個人のプライバシーを尊重しながら、文化・コミュニティ活動を積極的に展開することが、地域の活性化につながります。そのためには、住んでいる人の理解を得ながら、千里の再生・新しい「まちづくり」をめざしたい。

・人と人との交流

1. 子どもと地域

子どもは地域の宝であり、地域全体で育成していく。

子育て支援（現在、保育園等で実施されている幼児親子対象の子育て支援や、虐待児相談、病児保育の一層の充実を望む）

子ども会の育成指導の改革（イベントのあり方など、大人がすべてをお膳立てするのではなく、子どもに主体性をもたせ「子どもが自ら生きる力を育みながら、地域における教育力の創造」を目指したい）

子ども社会に縦の関係の構築（子ども会の自主的な活動を通じて、地域の子ども社会に縦の関係が生まれるように積極的な配慮をする）

学校と地域（学校の情報を地域に積極的に公開し、地域の住民だれもが気軽に学校を訪問できるようにする）

2. 若者と地域

今、千里で最も欠けているものに、若者の参加が少ないこと。

地域のあらゆるところにもっと若者が参画しやすいような環境を整える。
青年会の育成。

3. 高齢者と地域

高齢者の地域活動（もっと地域に出て活動していただく）

若い世代との交流（三世代、四世代交流）

4. 障害者と地域

ノーマライゼーションとコミュニティ（障害者が地域の中で健常者と共に当たり前前に生き、生活出来るようにするための条件づくりを）

地域に障害者のグループホーム作りや生活支援。

地域において障害者のシビルミニマムの確立。

障害児の豊かな放課後の保障（学童保育の充実）

道路、住宅をはじめ、公共施設のバリアフリー化の推進と強化。

障害者や高齢者に対する総合的なユニバーサルデザインの策定。

5. 生涯学習と地域

千里の歴史とまちづくりについて、学校の空き教室などを利用し地域学校の開設。

地域単位での学習会の開催。

・イベントの現状と新しいイベントの創造

各住区においては、盆踊り、市民体育祭などが定着しています。千里全体の取り組みとしては、千里ニュータウン少年野球大会、千里ニュータウンこどもスポーツ大会、千里こどもカ・ニバル、よっといで祭り等が成功している。

その他、福祉委員会、体育振興会、青少年対策委員会など、各種団体主催のイベントもそれぞれ定着している。

今後望まれるのは

千里がひとつになれるような、例えば「千里まつり」のようなものを年一回開催したい。

北千里地区と南千里地区、また豊中地区との連携。

「ふる里・千里」の創造。

・ 文化的環境の確立

千里に限らず「文化面」はスポーツ面に比べ振興が遅れている。スポーツ同様文化の振興がコミュニティの活性化につながる。また、千里在住の文化人やプロの芸術家等の協力を得て、広く文化芸術の環境を整える。

文化、芸術、学術の交流促進（大阪大学を始め、万博公園内の学術施設等千里近郊の恵まれた環境を活用した市民大学等の開催）。

文化、芸術を育成。また、千里在住の文化人、芸術家との交流促進（市民講座やカルチャースクール等の開催）。

文化、芸術を中心としたイベントの開催（街角美術展や街角コンサートなどの小さなイベントから、千里美術展、千里音楽祭などの継続的に行えるものを開催）。

国際的な文化、芸術、学術の交流（海外からの留学生などとの交流）。

・ 自治会活動の展望

現在の自治会は行政の連絡機能的なところもありますが、唯一全住民をまとめた組織であり、その存在はますます大きな役割を担っています。

将来の展望としては

自治会の会則の見直しを図る（特定の人が長期間同じポストに就き、そのため地域内の多くの優れた人材の参画が阻まれるようではいけない）。

住区内のイベントは、自治会役員が取り仕切るのではなく、広く住民が自由に参画できる環境を整える。

役員経験者で現在未活動の人や、地域外で活躍している人の参画を促す（いろんな人材を発掘する）。

防災に強い住区の構築と、いざという時のシステムを確立する（情報を的確にそして迅速に住民に伝達する）。

団地における自治会未加入会員への対策。

若者に活躍の場を与える（若者の参加を呼びかける）。

・ 各種団体の活動

それぞれの団体が独自のイベントを実施されており、さらにきめ細やかな取り組みをしていただくと共に、自由な発想で活躍するグループの誕生を推進していきたい。

団体間の交流を図る（ネットワークの推進）。

既定の団体に属さない、ボランティア活動やNPOなど各種グループ活動の推進、福祉サービスの充実。

コミュニティビジネス、地域での仕事起こしなどを推進（近隣センターの空き店舗などを活用し、住民生活のサポートやセーフティーネットが行える環境の整備）。

・住民意識の高揚とまちづくりへの住民参加

で申し上げたように、千里に住む人全員が「私は千里の人」である、また、「私のふる里は千里」です、と誇りをもって言えるように、住民意識を高めていくことが大切である。

そのためには

情報の提供、発信（PRの研究と方法）

町づくりへ住民の参画のシステムづくり（住民協議会的なもの）

コミュニティの拠点として、南北千里に1ヶ所ずつのコミュニティセンターの早期設置。

公民館や市民ホールの利用規定を緩和し、住民であればもっと自由に利用できるようにする。

・夢のあるまちづくりへ

既成のものにとらわれず、自由奔放に発想ができるようなまちをめざす。

千里は多数の学生が通過するまち。この若者たちが好んで集まる環境を作り出せないか。活気のある楽しい若者のまちの創出。

小さな公園を里山にして、住民の手による果樹の森（例えば桃山台には桃の木、青山台には柿の木を植える）また、お花畑などをつくり、近隣の人たちが自由に世話ができるようにして、うるおいのあるまちにする。

若者が自由にたむろできる場所の確保（市民ホールの開放、学校の空き教室の活用など）

集合住宅の建て替え時に、棟毎に小集会室を設け、居住者同志で食事やだらん等が出来るモデル住宅の建設（井戸端会議の推進）

まとめ

他人と関わりたくない人が多い。「人の世話をするのモイヤだが、世話をされるのモイヤ」といった人達への理解とPR。

IT化が進み、全てコンピュータで処理される時代ですが、そんな時代だからこそ、人の温かみ、人の優しさが必要になってくる。そこでコミュニティ（近隣との友好、交流）が大切である。

井戸端会議（世代を越え）の推進。

地域での子どものガキ大将を推進し、縦社会を構築する。

乱雑な開発ではなく、整然とした開発により、人口の増加を図る。

ハード面だけでなく、心のバリアフリー（差別をなくしどんな立場の人とも温かく交流）、心の環境循環型（道に落ちているたばこの吸殻1つが拾える、そんな優しい心を持ち合う）の町を目指したい。

赤ちゃんからお年寄りまで、心の通い合う町「千里」の構築が、千里の活性化及び再生につながるものと思われる。

第4グループ（コミュニティ支援施設）

まえがき

1．千里ニュータウンの地域施設構成

千里ニュータウンは、近隣住区理論に基づき計画された。基本単位である近隣住区は人口1万人を想定した住民の日常生活圏である。その上位に位置するのが地区であり、3～5の近隣住区が集まって形成している。原則として各近隣住区に1ヶ所配置される近隣センターには生鮮食料品店などの日常生活施設が配置されている。また、各地区の中心である鉄道駅前に配置される地区センターにはより専門的な商店や公的サービス機関などが配置されている。また、千里中央駅前には千里ニュータウン全体の中心となる中央地区センターがあり、更に専門的な店舗や百貨店など高度な施設が配置されている。

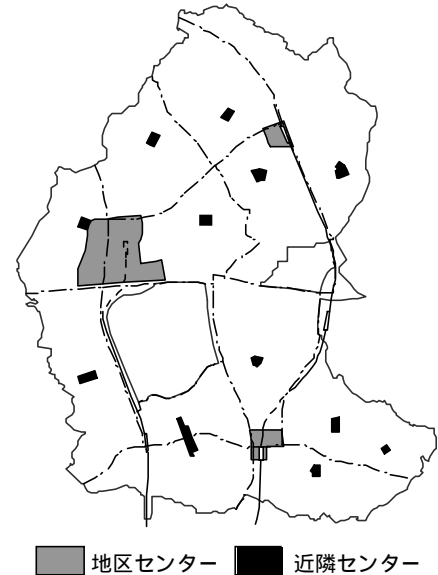


図1．千里ニュータウンの地区センターおよび近隣センター

2．近隣センター・地区センターが抱える問題点

街開きから40年が経過した現在、施設の老朽化、陳腐化、モータリゼーションの発達による日常行動圏の拡大、さらに消費者嗜好の多様化など様々な社会の変化に伴い、日常の買物でさえ品揃えの豊富な地区センターやニュータウン以外の地区へ足を運ぶようになってきている。その結果、近隣センターでは客足が遠のくことで空き店舗が増えている。このような状況を受け、移動手段に乏しい高齢者は日常生活に不便を強いられているのが現状である。また、北地区センターではリニューアルが行われ、リニューアル前よりは客が増えた感がある。一方、南地区センターは再開発中であり、その開発計画が開示されていない。ぜひ住民の声を取り入れ、南地区センターが好立地であることを最大限に活かした計画が待たれるところである。

3．地域施設からみた千里ニュータウンの活性化

これらの問題をふまえ、我々は、住民の日常生活や活動に対応した地域施設のあり方、日常生活にゆとりやうるおいを与える地域施設のあり方を検討・提案を行う。特に、現在の近隣センターはニュータウン建設当時と比べると活気に欠け、空き店舗が目立つが、原則として住民の徒歩圏に立地していること、小学校や医療センターと近接していることなど、これからのニュータウンにとって重要な施設用地であり、その可能性に着目した。我々は、近隣センターの価値を今一度見直し、いかに

この近隣センターの持つ可能性を引き出すか、住民の日常生活を支援するかに重点を置いている。当然のことながら、近隣センターの活性化を検討する際には、地区センターとの役割分担や連携、医療センターとの連携、小学校の空き教室活用なども視野に入れる必要がある。ニュータウン内にあるすべての地域施設の活性化が必要であることを認識した上で提言を行う。

・近隣センターの活性化

1．近隣センターの必要性

需要を取り戻すのは容易でないが、身近な地区居住者の生活には重要な存在であり、近隣センターのあり方を大幅に考え直して展望を開く必要がある。

単なる繁盛ではなく、住民の日常生活レベルの維持とゆとりある生き方のできるセンターへ。

<参考> ある近隣センターではマーケット内のうどん屋が主婦たちのサロンになっている。

商業的利用に加えて、情報・福祉的利用（デイサービスや訪問介護の基地など）を強化し、多世代が利用し、共存共栄できる生活支援センターへ。

<参考> 近隣センターで「街かどデイハウス事業」を行っていたところがある。

2．近隣センターの活性化の方向

吹田市の8近隣センターそれぞれの地理的特性、居住者特性などを活かし、近隣センターごとに個性を出す。

近隣センターの商店、医療センターおよび市民ホール・公園などの公共施設が協力しあい、さらにそれらの相乗効果によって活性化させる。

近隣センターの活性化は、サービス提供者と住民が共同して取り組んでいくことが大切である。

3．近隣センターの活性化のための方策

(1) 近隣センターの活性化

近隣センターは従来の商業機能だけでの活性化は困難である。

<参考> 近隣センターでも、商売だけで生計を立てていくには相当な努力が必要である。

<参考> 行動範囲の比較的狭い高齢者も、「近さ」以上に「品揃えの豊富さ」によって日常生活用品（食品を含む）の購入先を選んでいる。近隣センターで業種の見直し、品揃えの相互補完などを進める必要がある。（図2参照）

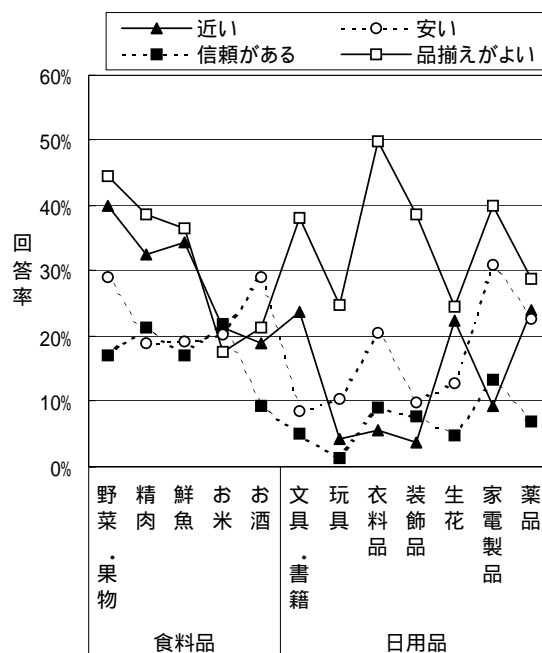


図2 購入場所の選択理由（複数回答）
（本委員会実施のアンケート調査より）



写真1. 奮闘する豆腐屋



写真2. 「街角広場」(豊中市新千里東町)

<参考> 近隣センターが周辺よりも高いところにあるなど、地形的に不利な条件をもつ近隣センターが多く存在する。

近隣センターの商業では、近隣センターに足を運ぶ客だけを対象として考えていてはいけない。配達なども考えに入れる必要がある。

<参考> 米屋や酒屋などの配達を請け負う業種は存続している。

<参考> 竹見台近隣センターの豆腐屋では、積極的に注文を取りに歩いた結果、顧客が増え、遠方まで配達するようになっている。(写真1参照)

コミュニティ支援の強化を含めた活性化を目指す。(写真2参照)

NPOで活性化を目指し、近隣センターにNPOのビジネスセンターを設ける。

近隣センターをネットワーク化して情報を共有し、近隣センター相互の広報展開やイベント展開などを行う。

住民共同出資の店舗経営も考える。

<参考> 佐竹台近隣センターの「かぼちゃの家」は、障害者を持つ親たちが共同で運営している。

<参考> 家賃が高く、個人で店舗を借用しても採算がとりにくい。

若者が利用するようなにぎやかな場所を設けて、若者が住み集う街にしたい。

(2) 少子化に対応した活性化

行動範囲が狭く、近隣センターをよく利用するであろう育児層と高齢層にあった活性化策を図る。

<参考> 高齢クラブでは、世代間交流の一環として、子育て支援への動きがある。

<参考> 高野台の高齢憩いの間では、児童書を置いて高齢者と児童の交流を図っている。

市民ホールなどを、乳幼児を抱えるお母さんのための子育て支援に利用する。

<参考> 少子化によって、同じ子育て仲間が少なくストレスがたまる。また、同じ子育て仲間が集まる場所がない。

<参考> 買物中に子どもを世話してくれるシステムが欲しいという声がある。

<参考> 藤白台や津雲台では、若いお母さん達が幼児連れで集まって一緒に遊べる時間を、福祉委員会が市民ホール内に設けたところ好評で、参加者も多い。(写真3参照)



写真3．子育て支援活動例(津雲台)

少子化によって発生している小学校の空き教室を有効活用する。

<参考> 小学校の空き教室の活用も含めて、より広いエリアの活性化を図る。よく利用されている市民ホールであるが、さらに効果的な利用により市民ホールを活用したい。

<参考> いくつかの市民ホールでは防音対策をしている部屋があり、音楽の練習ができるようになっている。

<参考> 桃山台小学校の空き教室のうち1教室は音楽の練習が可能な部屋にしており、高校生のバンドなどは夏休みにこの教室を利用している。

児童館のようなものを作り、子どもが来やすい近隣センターにする。

(3) 住民の高齢化に対応した活性化

シニアが仕事をすることができるスペース(活動室)を設ける。

<参考> 退職した男性は時間を持て余している上に居場所がない。

<参考> 千里ニュータウンは、様々な方面で活躍してきた人が多く、人材が豊富である。

配食サービスを行う場所や気軽に食事がとれる場所を設ける。

<参考> 千里ニュータウンの近隣センターの中には、飲食店の形式で、高齢者に安価で食事を提供している店がある。

<参考> 一人暮らしの人は日常の食事も外へ行くことが多い。喫茶店のモーニングでは高齢の方が一人で食べていることも多い。

近隣センターに、オープンカフェやベンチなどを設け、のんびり買物などができる空間を作る。(図

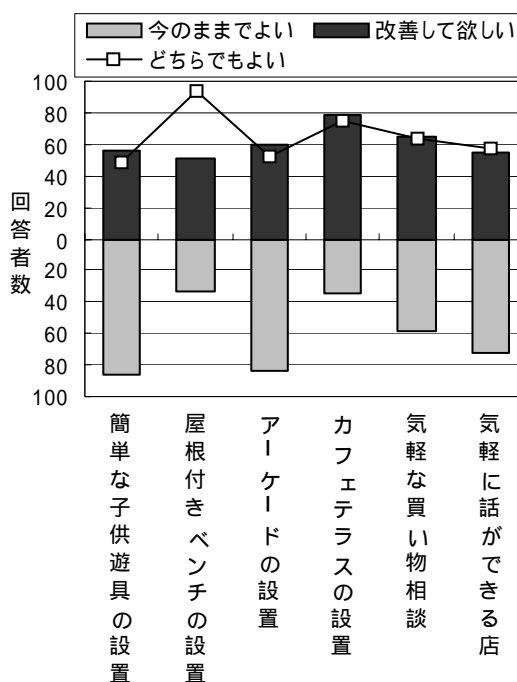


図3．近隣センターに求めるもの
(本委員会実施のアンケート調査より)

3 参照)

気楽に立ち寄れる飲み屋、コミュニティの復活を目指す意味で風呂屋などがほしい。

例えば、商業は駅前に集積させ、近隣センターに生活支援をする場所を設ける。さらに、地区センターと近隣センターなどを結ぶ電気巡回バスを走らせる。

<参考> 他の地域にはない計画的に整備された道路を活用する。

<参考> 高齢者は出不精になりがちなので高齢者のモビリティを高める。

4. 医療センターなどの充実

(1) 医療センター充実の必要性

気軽に受診できるかかりつけのお医者さんの充実を図り、高齢者や子どもの安心した暮らしを支えることが必要である。

(2) 医療センターの充実

住区住民の年代層に合わせて診療の充実を図る。

<参考> 高齢者：高血圧、糖尿病、眼病、歯周病、腰痛、骨折など。

<参考> 子育て層：発熱、ひきつけ、子どもの健康相談など。

総合病院との連携や、医療センター間の連携を図る。

<参考> 高齢者は複数科目に受診する場合も多く、医療センター各科目間の連携が求められる。

5. 大規模災害への備え

(1) 大規模災害(大地震、大型台風の直撃など)への備えの必要性

ニュータウンは自ら大規模災害への備えをしておくことが望ましい。

<参考> 吹田市では旧市内等住宅密度が高い地区の被害が大きいこともありうるので、救済は旧市内等が優先されると考えられる。

(2) 食料など緊急生活物資の備え

食料や水など生活必需品を備蓄することはコストも嵩み、管理も大変であるので、救済物資が届くまでは商品の陳列品・流通在庫などで生活を維持できるようにする。そのため、近隣センターの商業を活性化させて、商品を増やすようにする。

(3) 緊急医療への備え

大規模災害時の緊急医療については、総合病院へ急患が殺到することが予想され、住区医療センターで可能な限り応急処置が施せるように日常の医療体制を整備しておく必要がある。

(4) 近隣センター周辺を一体とした避難・生活維持態勢

ニュータウンの避難場所である各住区の公園や小学校は恵まれているので、避難以降の生活維持については緊急生活物資、緊急医療、緊急通信手段に絞って考えていきたい。緊急通信手段は、小学校や市民ホールの機器を充実させたい。

・地区センターの活性化、再開発

1. 北地区センターの充実

北地区センターは医療ビルや大型商業ビルが完成するなどのリニューアルが行われ、ニュータウンの北の玄関口として機能が整ってきた。

- ・ 地区公民館や図書館など公共施設の充実拡大が課題である。
＜参考＞ 地区公民館は更新計画が進んでいる。一方、図書館などについては北千里センタービルの更新も含めた施設・機能の拡大を期待する。
- ・ 商業施設は小規模スーパーや一般商店街の業種・商品構成について個性を出すように一層の工夫を求めたい。
＜参考＞ アンケート結果から、品質、品揃え、安さ等に問題があるという指摘がある。
- ・ 北地区センター内の通路は、車いす利用者にとって問題個所が多い。点検や補修が必要である。

2. 南地区センターの活性化、再開発

(1) 南地区センターの立地の利点

南地区センターの計画では、その総合公園、総合病院などの施設面、交通面など極めて有利な立地条件を再認識することが大切である。

(2) 再開発に関する情報開示と市民参加の推進

住民には生活者としての苦楽の経験がある。また自分たちが生活しやすい楽しい町にしようという意欲も高い。その実経験などを計画に活かすことが大切である。再開発計画の進捗の提示を求める声も大きいので、早期に計画を開示し、計画に市民参加できるような取り組みを望む。

(3) 南地区センターの整備の方策

ペDESTリアンデッキの整備

千里南公園が駅に直近の総合公園であるという好条件を活かし、南千里駅と2階レベルのデッキでつなぐ。このデッキにより、以下のような公園、商店街、駅を一体とした地区センターとする。

- ・ 歩車分離による双方の流れの円滑化、交通安全の確保を図ることができる。
- ・ 人の流れが種々の施設に沿って行くようになり、多くの来訪者の利便性が増す。
- ・ 障害者、病弱者、高齢者、幼児連れなどの人に優しいバリアフリーのセンターになる。

＜参考＞ 駅、商店街、公園のアクセスが容易になるため、周辺の主婦はこの案を歓迎している。

＜参考＞ アンケートの結果からも全体で約2割、南地区住民に限定すれば約4割が南地区センターの建設に重大な関心を示している。

医療関連施設の充実

地域医療の核として新千里病院のリフレッシュを行うと同時に、老健施設を併設し、医療のみならず福祉的な機能も併せ持つようにする。

アミューズメント機能の充実(フィットネスクラブ、シネマコンプレックス、温水プールなど)

このような機能は若者を集めるだけでなく、高齢者にとっても健康増進など

に有効である。

大規模ショッピングセンターの誘致

<参考> 現在の南地区センターは、買物には魅力が欠けるため、亥の子谷商店街などのニュータウン外へ買物に行く住民が多い。

飲食店の充実

現在は、家族で寄れるカフェテラスのような店や、ぶらりと立ち寄れる飲み屋がない。コミュニティに役立つなど、このような店が果たす役割は大きい。色々な飲食店を揃えて自由に選択する楽しさを増やし、客足を呼ぶようにしたい。

文化・教育施設の充実

公共施設の充実

駅前でもあり、人口4万人近くを有する南地区センターには、市の出張所や複数の銀行支店を残すと同時に充実させる必要がある。

交通施設の整備

通勤者のためではなく、昼間の買い物客用に短時間の無料駐輪場を設ける。また駐車場は地下に設け、地上1、2階を有効に利用する。

自転車専用路の整備

<参考> 自動車よりもメリットを出すことで、人は歩いたり、自転車を利用するようになり、近隣センターを利用する可能性が出てくる。

障害者施設の充実

ニュータウン内では、中途障害者を含め、障害児者が必要とする施設の整備が不十分である。

(4) 大規模災害への備え

耐震や防火など、施設の堅牢化を進める。

指揮系統が円滑に機能するように、場所の整備や通信機器などの充実を図る。

新千里病院、救命救急センターを含めて、緊急医療体制の強化を進めておく。

流通在庫などを大災害時に利用できるよう、商店会、病院、住民、市など関係者間で協議を進めておく。

<参考> 大規模災害に際して、地区センターは救急救援の人や、資材、器材が集積しやすい立地である。鉄道や路面交通網にも恵まれ、公共施設や総合病院など大災害の対応に不可欠な機能も備えている。

<参考> 食料品など緊急時の生活必需品も流通在庫が短時日の支えに期待できる。

第5グループ（住宅・交通）

まえがき

千里ニュータウンは元からあった古い街を改造するのではなく、大規模一体的に宅地造成を行い、その時点から「ゆとりある緑豊かで良好な住環境」を誇りとして高い理想を掲げて開発したため、ほぼ理想的な東洋一の住環境がつくられた。

ところがニュータウンまちびらきから40年の歳月が経ち、さまざまな問題が発生している。

- (1) ニュータウン開発当初の一斉入居者、即ちその当時の30歳・40歳代の活力ある世代は、今日揃って高齢化し、人口の少子・高齢化は他地域に比べ著しい特色となっている。住宅問題はあらゆる年代、あらゆる家族構成が住めるような住宅政策が基本であると考えます。
- (2) 家族構成から千里ニュータウンに住めなくなり、多くの30歳・40歳代の世代人口が流出した。活力ある若い世代の人口増加政策を検討すべきである。住宅供給のニューモデルもここに提案したい。
- (3) ユニバーサルデザインの視点が初期の住区で全く欠如していたため高齢者・障害者が非常に住み難いため高齢者が歩いて暮らせるまちづくりを目指す。敷地単位の建て替えを生活の視点から見直す施策を考える。
- (4) マイカーの激増により違法駐車や生活道路の渋滞が増加してきた。根本的な対策が必要である。
- (5) 中央環状線で南北バス路線が分断されており、公共交通（バス）で非常に不便な所があり、深刻な問題となっている。バス路線の抜本的な再編が急務である。
- (6) 近年、経済優先主義が幅を利かせて、当初の理念から逸脱した密集低層マンションや小規模個別の高層マンションが次々と建てられ、羨望の的であった千里ニュータウンの住環境が破壊されつつある。特に低層住居地域と中高層住居地域の境界地帯で給与住宅の分譲建て替えが敷地単位の建て替えのため、住環境を巡る紛争が発生し、重大問題になってきている。総合的な視点に立った対策が求められる。
- (7) 公社公団の建て替えは千里ニュータウン全体の再生理念を考えて計画されているか、全体とのバランスがどこで如何にチェックされているか、居住者の立場での検討が必要である。

この大切な時にこそ、千里ニュータウンの元々の理念である「ゆとりある緑豊かで良好な住環境」の維持という考えを基本に据え、ニュータウン再生のモデルとなるべき100年先まで見通した再生計画を立てなければ、将来に大きな禍根を残すことになる。

我々及び次世代の人達が住みたいまち、また住みやすいまちを創ることがこの100人委員会の役目であると思う。

それらの問題点を個別具体的に討議を進めた結果下記の提案をする。

・住宅問題

1. 住宅の理念

千里ニュータウン建設当初の理念を50年・100年先までも大切に存続させねばならない。「みどり豊かな歩いて暮らせるまち」をキャッチフレーズとする。



写真左 緑豊かな街

緑、光、水の中に低層住宅群と点在する中高層住宅群と商業施設が計画的に配置された姿は20世紀に発明された都市の姿としての最大の成果といえよう。こうした景観、デザインを破壊することなく、更に新しい都市設計、都市デザインの手法の導入が必要である。

千里ニュータウンは大阪から10キロ圏で良好な住環境を理想に開発された。万博公園とともに千里ニュータウンの住環境は吹田が東洋に誇る宝である。

千里ニュータウンは田園都市。緑いっぱいの低層住宅群が十分な間隔をとって配置され、中高層住宅は住環境を配慮して建設された。

住環境を守り建物の高さを制限する基本方針設定が望ましい。

千里ニュータウンのモデルは英国の街であるが、英国はテラスハウスで低層住宅である。日本は土地が狭いこともあってそうはいかないが、現状を守るべきである。

日本の人口減少時代がくる。将来の住宅需要を考え、千里ニュータウンに東京都心のような超高層マンションを建てるべきでない。環境破壊を来たせば誰もが住みたい街の魅力を失う懸念がある。

一般住宅（一戸建住宅）と集合住宅（公団、公社、府営、企業）の特性を活かしてまちづくりを進める。用途地域、建ぺい率、容積率の規制を見直し、住環境の調和を大切にする。

あらゆる年代、あらゆる家族構成が千里ニュータウンに住めるようなバランスのとれた総合政策が望ましい。そのための誘導基準、開発要綱を提案したい。

多世帯がいつまでも、多様な価値観に対応でき不自由なく住めるまちにする。

敷地単位をベースとして周辺のことを配慮しない住環境を破壊する営利本位の再開発が現状のように頻発すると、千里ニュータウンの資産ともいえる

良好な住環境が失われてしまう。二、三十年後には誰もが住みたいまちの魅力を失っている恐れがある。

我々は“家づくり”ではなく“街づくり”を考えるべきである。

これからの建物の耐用年数は100年以上を目標にすべきである。

バリアフリー、ユニバーサルデザインの完備された街づくりを進める。高齢者、障害者等が利用する車椅子で駅、道路から室内まで自由に動ける構造を理想とする。

千里ニュータウンの良好な住環境を保全育成できる基本方針を確立すべきである。

2. 人口構成とコミュニティ

毎日外出することが高齢者の健康のために望ましい。高齢者が歩いて行ける範囲に毎日の買い物ができる施設をつくることも必要である。

千里ニュータウンの中の住都公団住宅は残存価に対し、改良して使用方法の一つとして2戸1戸へ改善し、家族構成の多様化を容易にし、住民活動やまちの活性化を促す。

集合住宅については、高齢者や障害者に優しいまちづくりを目指すとともに、2世代が共生可能な居住空間の確保と、住民に開かれたコミュニティ活動（集会所、クラブ活動、老人施設、保育所等）の場を設ける。

府営では入居者募集の際、30軒あるとすると、働き盛りの家庭は3軒しか入れず、多くは低所得家族に割り当てとのこと。せめて半々にし、普通の住民構成が出来る様にしなければ、千里の活性化はありえない。

3. 住宅供給のニューモデル

開発当初のように30代・40代の若い世帯が千里ニュータウンに居住できるように、準公的機関の定期借家制度を整備する。

それは、戸建て住宅の空き家を紹介する「準公的紹介システム」で、明け渡しの時の心配がないようにする住宅供給のニューモデルである。

この組織は行政の支援を受け、NPOで推進できるよう提案したい。

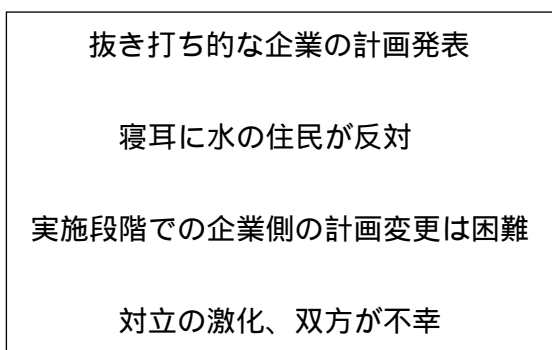
千里ニュータウン内には市営、府営、公団、行政機関所有住宅、一般企業の社宅等、多岐に分かれていて、それぞれに取り組み対応が異なる。これらに対し、行政の対応は、合法的であれば売買、建て替え等は全て許可すると云う。すでに、民間所有の建物は不動産物件として売買され、建て替え分譲がなされ近隣並びに千里ニュータウン全体とのバランスがどこで、如何にチェックされているのか不明である。

また、大阪府企業局、住都公団等の物件も売りに出されるのではないかとの噂もあり、土地の権利の移転に備え、デザインコンペや開発方針の統一などで環境保全に対するバランスのとれた全体指針を設けることが急務である。そして、各建物等の残存価値を償却する期間（特に公団）にリニューアルと並行して、しっかりした将来計画を確立することが必要である。

企業が動くまでに開発要綱、誘導基準を設けることが必要である。企業としても、設計してからの変更の申し入れにはコスト面から受け入れにくいと

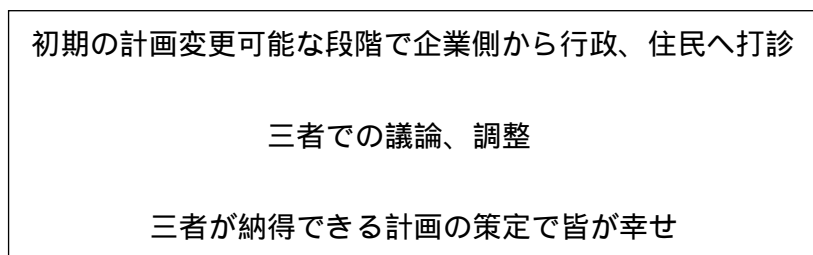
思われる。

開発計画公表の前段階に、住民、行政、企業の話し合いが必要である。
 これまでは、



という構図であった。

これからは、



という構図にしなければならない。

第三者的な千里ニュータウン100人委員会が話し合いのプラットフォームになるのも一案である。また、ニュータウンには府有地などの公有地が多いが、その開発に際しても、企業の開発行為と同様な手順を踏む必要がある。

4. 建築物（建ぺい率、容積率、建物の高さ）

新たな建物の高さ規制・誘導策を提案する。住宅地として低層・中高層住宅が混在するなかで現在の住環境を守るため建物の高さ規制を見直し、あるべき姿に誘導していく必要がある。

用途地域の境界線で環境、眺望、日照、プライバシーで建築紛争が多発している。用途地域の境界線に緩衝地帯となるべく低層 - 中層 - 高層の順に建物は配置されるような容積率規制の段階的な誘導地帯を設けるべきである。用途地域の異なる境界地帯には容積率規制の段階的な規制が望ましい。

さらに用途地域の再検討を提起したい。

住みよいまちづくりのために、地区毎に建築協定の締結を奨励する。住環境を守るため低層住宅地においても南側住宅は北側住宅に配慮する。また人工地盤を盛り上げ、実質3階建ての建築は防止する。

第一種低層住居専用地域では共同住宅を規制すべきである。

用途地域の低層、中高層と並ぶ地域は容積率の段階的規制が望ましい。

現状、低層地域は建ぺい率40%・容積率80%に対して中高層地域は建ぺ

い率60%容積率200%と極めてアンバランスである。容積率を現状の200%から120%に見直すよう提案したい。

因みに豊中市の基本方針は千里ニュータウンの容積率誘導基準は150%である。

開発当初の千里ニュータウンの給与住宅は容積率200%いっぱいでは建築されておらず、余裕を持っていた。ところが、転売された給与住宅用地は採算を理由に容積率200%で建築され、このことが環境悪化につながっている。土地の共同化を図り、少なくとも密集しないように建ぺい率は抑えるべきである。

5. 土地利用

公団団地の建て替えが発生している所での用地転売、或いは社宅用地の転売など例があり乱開発になる。民間マンションへの建て替えは、現地形の形状から個別の敷地単位で建て替えになるため、バリアフリーへの解決に全くつながらない。

その一方で千里ニュータウンの資産ともいえる緑が失われている。住環境の悪化を防ぐ対策が必要である。

6. 住環境

現状において何を残し、何を守り、今後の時代の変化にどう対応するのか？建て替えを待たずして変革が急務であるもの（エレベーターの設置、バリアフリー・ユニバーサルデザイン化）。次に近未来～中期～長期で考えなければならないもの。千里ニュータウン全体の再生理念の下に住区、団地、用途地域毎に考えていく必要がある。

集合住宅団地の管理に関しては吹田市域、豊中市域で協議会をつくるべきである。

当初からの集合住宅は子育て層などを呼び込むには手狭である。もっと広くして老若ともに住めるようにする必要がある。

集合住宅は管理が重要な問題であるが、管理会社・管理組合には5～10年先のビジョンがない。千里ニュータウン全体やその周辺地域を含めた管理組合のネットワークを形成できないか。

吹田市には公団の窓口がない。対応の窓口が必要だと思う。

府住宅供給公社賃貸住宅の建て替えについて、千里ニュータウンの住環境保全から積極的に意見具申が望ましい。

千里ニュータウン内に建設される民間マンションは価額が高いので、若年層が入りたくても入れない。青山台の例では、高校生以下の子供が居住する予定がない新築マンションがある。居住者年齢も考えた再生ビジョンが必要である。

最近、若年層に人気があるマンションは、キッズルームなどの充実したコミュニティ施設がある戸数が多い物件に集中している。しかし、千里ニュータウン内の民間マンションは、戸数規模が小さいため、同年齢層が少ないことも予想され、子供のいる家庭にはメリットが小さいと判断されている。

民間業者は千里ニュータウンの住環境を壊さないように、地域の景観・環境に配慮して欲しい。指導基準を設けるべきである。

地域の環境・景観に調和した建物、生活の多様性に適合した住宅街づくりを目指した開発の誘導基準、開発要綱を設ける。

住宅環境保全ゾーンを設け、設計、デザインを誘導する。

戸建住居地域で敷地を分割して販売するところが増加している。分割後の最小面積規制を設けることが必要である。

千里ニュータウン内での住宅取引時の面積表示を壁芯計算ではなく、居住可能スペースを表わす内法計算にして、千里ニュータウン内の住宅の質的改善の一助とする。

中高層住宅地では、建て替えに際し、開放感のある緑地や空間を確保する。また、緑被率確保のための基準、規制を見直し、良好で緑豊かな環境を保全育成する。

カフェ等住民の視点から必要なものは導入すべきである。

メリハリをつけた規制、誘導が必要。緩和するところは更に緩和し、規制すべきところは更に厳しくすべきである。

7. 住宅と交通の係わり

最近、殆どの都市でマンションを建設する場合、戸数分の駐車スペースを作ることを義務づけている。しかし、最近では1軒で2台のマイカーを持つ家も少なくなく、また、来客の車がくること等もあり、マンション周辺は路上駐車で溢れている。これを解決するには1戸1台分と云う規制では不十分であり、さらに駐車し易い駐車場を建設すること（機械式立体駐車場は不適）等まで規制することが必要である。

団地も十分な（戸数の100%以上）駐車場を整備すべきである。

交通問題

1. 交通の理念

千里ニュータウンの公共交通は、南北方向に2本の鉄道が大阪市内へ通じ、この両交通を補完するようにモノレールと私営バスが運行されているが、バス交通には不便なところが多く、総合的に交通体系を再構築する必要性があり、市・行政・バス会社（阪急バス、近鉄バス）が協議できる場を設けるべきである。

自動車交通には、渋滞解消と生活道路への車の通り抜け問題とがあり、千里ニュータウン内だけでなく外の変化（例えば国際文化公園都市 - 人口5万人規模 - の建設等）が千里ニュータウンの道路交通に及ぼす影響を10年先を予測して対応方法を議論する必要がある。又、何でもマイカーに頼るような住民意識の改革も必要である。

更には福祉バス、乗合タクシー等の新しい交通施策の制度化を考えて行くことが望ましい。

現状の千里ニュータウンは、計画段階から妥協した点が多いため、歩行者空間のあり方としては不完全である。今後の再編の中で千里ニュータウンの理念を完璧にして行くことが我々の努めだと思う。

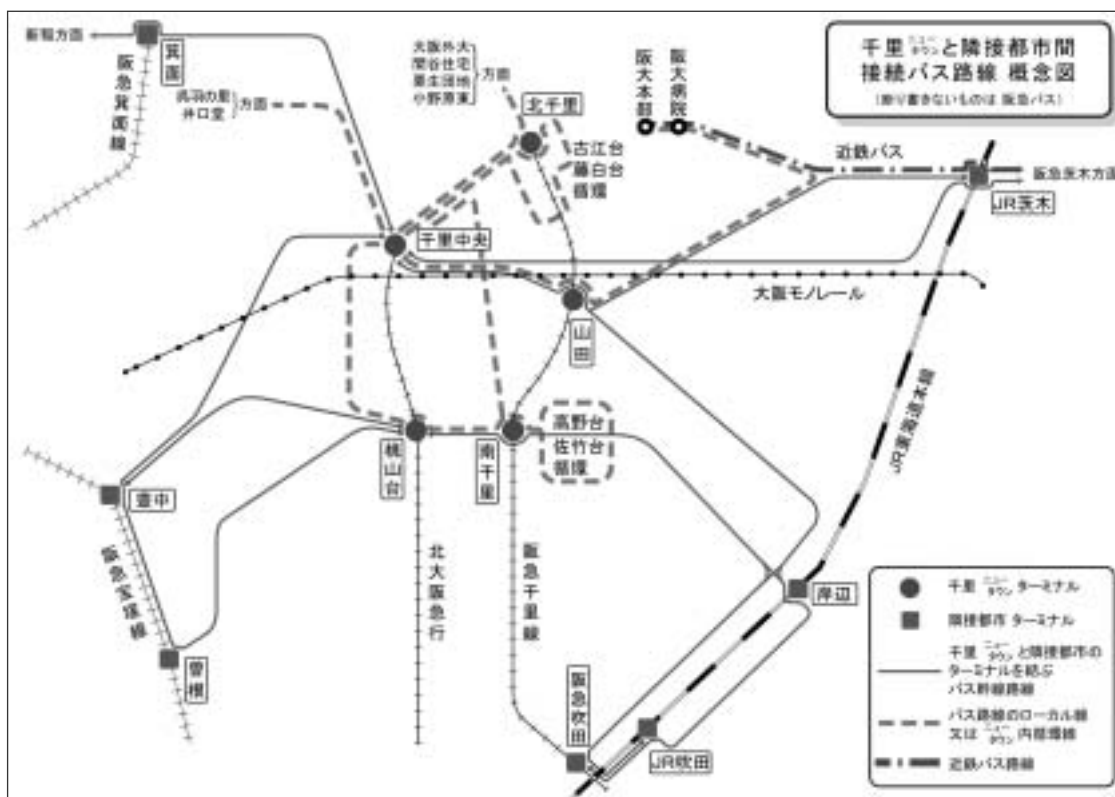


写真左 千里ライフサイエンスセンター

歩行者専用道の動線上につくられた公開空地であり、住民の憩いの場となっている。歩行者動線のユニバーサルデザイン化にも貢献しており、企業にインセンティブを与え、民間活力を利用したニュータウンの再生方法も有効であろう。

2. 公共交通（バス）

(1) 現状バス路線の問題点



現状の千里ニュータウンのバス路線はほとんどが千里中央、桃山台始発である。北千里、南千里も始発とし、例えば現状では不便な千里山、佐井寺

地区への路線の充実が必要である。

千里ニュータウン内ターミナルと隣接都市ターミナル間のバス連絡が不十分である。特に北千里からはどの隣接都市ターミナルともバスが通じていない。従って、北千里から茨木・箕面等への路線を開設する必要があるというのが基本的な考えである。

千里ニュータウンでは中央環状線を境として北半分と南半分にバス路線が分断されている。

これらの状況から、少なくとも下記路線の早期の開通（一部路線の延長）が望まれる。

* 北千里 - 阪大病院経由 - 茨木

〔阪急バスが無理なら、現在既に茨木 - 阪大病院 - 阪大本部を運行している近鉄バス路線の阪大本部 - 北千里間延長を要望する〕

* 北千里 - 箕面

〔北千里から今宮を通りR171号経由（又は箕面市の山麓線経由でも可）して箕面駅までを要望する〕

* 北千里 - 豊中

〔現在運行中の千里中央 - 豊中の路線の一部でも北千里まで延長を要望する〕

* 北千里・南千里 - 佐井寺・千里山

* 千里ニュータウンの北半分・南半分両方を循環するバス路線

〔北千里 - 桃山台、等〕

千里ニュータウンで鉄道とバスを利用する場合（千里中央・北千里・山田・南千里・桃山台経由）連絡割引制度の導入が望ましい。

全鉄道駅前ロータリーの動線の整備と乗り入れ規制が必要である。

（２）福祉バス等に関する新たな提言

認可された停留所へ出かけてバスに乗るのではなく、乗る人がいる時、そこにバスが寄るシステムが望ましい。バスを住宅地域に巡回する交通手段とする。千里ニュータウンは丁度よい大きさである。

大阪市のゾーンバス・システムや欧米のバスの様に何回乗っても料金は同じにすることが望ましい。乗り継ぎを無料にする。

高齢者のために、住区内に小型のコミュニティバスをきめこまかく走らす。バス停まで歩いて5分以上かかる地域の高齢者は、毎日の買い物にも苦労しているので、その対策として必要である。

福祉施設、大病院への通過バス路線と公共福祉バスの路線の整備をする。

3. 自動車交通

（１）通過交通問題

生活道路には幹線道路から迂回しない様な対策が必要である。

対策：一方通行にする。スピード制限をする。道路舗装を工夫する。トラフィックゾーン・システム。ボンエルフ等。



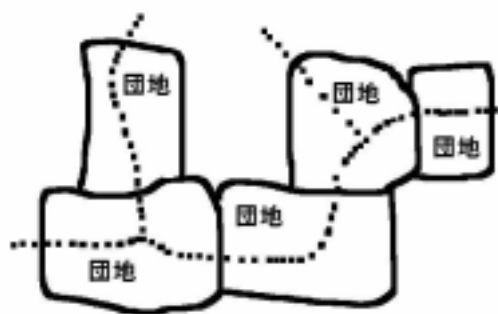
写真左 三田カルチャータウン
歩車分離の戸建て住宅街

ボンエルフ、クルドサックを用い、歩車分離、通過交通の排除を行っている。クルザックは千里ニュータウンでも導入されているが、戸建住宅地区においては歩車分離が十分ではない。

後期に建設された住区（豊中市域、竹見台、桃山台、青山台の一部）ではAタイプの歩行者専用道が創出されているが、前期に建設された住区（佐竹台、高野台、津雲台、古江台、藤白台）では歩行者専用道がつかわれていない。今後の千里ニュータウン再生時には各団地の土地を利用してBタイプの歩行者専用道を創出する必要がある。



A : 団地は、独立タイプ歩行者専用道



B : . . . は、敷地内通過タイプ歩行者専用道

スーパーブロック（団地）同士を歩行者専用道でつなぐことで歩行者空間が創出できる。

千里ニュータウンに出入りする自動車の通る（準）幹線道路に住宅が直面している所は一方通行による自動車の分散を図ったり、騒音・排ガスの緩衝地帯設置等の道路構造の改善が必要である（例 藤白台4丁目北縁金蘭千里学園付近）。

生活道路が抜け道になっている所は通行禁止や一方通行等により幹線道路へ誘導する（例 佐井寺方面へ通じる佐竹台1丁目）。

見通しを良くするため、中央分離帯の植木の背を低くする。

信号待ちを嫌ったり近道になるために生活道路へ迂回、又はバイパスする自動車に対する道路行政が求められる。

千里ニュータウン周辺の開発地からの流入が増加する一方であり、渋滞が起きている。藤白台4丁目と北公園の間の区画街路、並びに、これにつな

がる青山台中学北側の区画街路へ北千里駅前の渋滞を避けるため車が進入する。従って、千里3号線を延長して北公園苗圃内を貫通させ小野原方面へ接続する必要がある。

千里ニュータウンと外部を接続する道路と問題箇所

佐竹台1、3丁目と佐井寺4、3丁目間の生活道路

佐竹台3丁目と同上間の生活道路

佐竹台4、6丁目と佐井寺3丁目・五月が丘西間の生活道路

古江台6丁目と万博公園間の準幹線道路

古江台6丁目・藤白台1丁目と山田丘・小野原間の準幹線道路

藤白台5丁目と上山田・小野原・山田丘間の生活道路

新千里西町3丁目と緑丘3丁目・北緑丘3丁目間の準幹線道路

が特に交通量が多く騒音大。通過車両を千里ニュータウンの外周道路や幹線道路に誘導できるように広域的につぎの都市計画道路の整備を急ぐ必要がある。

豊中 - 箕面 - 小野原線

豊中 - 岸部線

佐井寺 - 片山 - 高浜線

箕面 - 山田線

(2) 駐車・駐輪場問題

幹線道路の路上駐車禁止を徹底する。

短時間の駅周辺の利用は駐車料金を無料にする(例 大阪駅前・新大阪駅前等)。

駅前に駐輪場を完備して生活道路上の不法駐輪を禁止する必要がある。

駐車場と共に駐輪場も増設しなければならない。

4. 歩行者交通

完全歩車分離の歩道を完備する。高齢者・車椅子・幼児・学童のためにも必須である。

一般住宅(一戸建住宅)と集合住宅の間の道路は、両側歩道を設ける。また生活道路は一方通行を採用し一般通行車対策をする。

団地の中などでは車道と歩道の区別がないが、車道と歩道が全く別々に建物にアクセスできる構造にすべきである。

建て替えの際に、歩行者空間創出のガイドラインとなる指針が必要である。

・ 今後の方針 - 千里ニュータウン再生実現への戦略 -

当委員会に於いて様々な意見提言がなされたが、これらを如何にして実現していくかというシステム面に言及したい。

千里ニュータウン再生に関わってくる主体、即ち、住民団体、自治会、管理組合、吹田市・豊中市及び周辺自治体、大阪府、公社・公団、商店会、デベロッパー等がそれぞれ単独で意思決定を行うのではなく、「千里ニュータウン再生戦略

本部」とでも言うべき組織で調整を図ることが必要である。元来、千里ニュータウンが総合的に計画開発され東洋一の住環境が創出された歴史的経緯を考えれば、その必要性は明らかである。

ここで参考になるのが、産官学民の四者を構成メンバーとする「多摩NT学会」である。注目すべきは(1)この四者が対等な立場で活動し、雰囲気盛り上げている。(2)参加したい者を拒まない組織形態である。

100人委員会で提言された市民の貴重な意見は千里ニュータウンを再生していく偉大なエネルギーである。ここでの提言を実現させるため、「吹田市千里ニュータウン地区住環境市民会議」を設立し、100人委員会の意見を提起していく。

まず手始めに、千里40年イベントの中で何らかのパフォーマンスをすることで存在を明らかにしていく。やりやすいものとしてはシンポジウムやニュータウン再生プランの提示が考えられる。

100人委員会をNPO団体として登録し、活動を進めることも考えられる。参加したい者を拒まない組織がよい。また、この組織が住民の声を十分反映するように運営する必要がある。

= 委員会の開催経過 =

[全体会議]

1	平成 13 年	3 月 31 日(土)	13 : 30 ~	メイシアター	(集会室)
2	平成 13 年	4 月 28 日(土)	14 : 00 ~	市民会館	(大集会室)
3	平成 13 年	5 月 26 日(土)	14 : 00 ~	北千里小学校	(屋内運動場)
4	平成 13 年	6 月 23 日(土)	18 : 00 ~	メイシアター	(集会室)
5	平成 13 年	7 月 15 日(土)	18 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
6	平成 13 年	8 月 25 日(土)	14 : 00 ~	市役所	(研修室)
7	平成 13 年	9 月 22 日(土)	14 : 00 ~	市役所	(研修室)
8	平成 13 年	10 月 20 日(土)	14 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
9	平成 13 年	10 月 28 日(日)	18 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
10	平成 13 年	11 月 17 日(土)	14 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
11	平成 13 年	11 月 18 日(日)	18 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
12	平成 13 年	12 月 15 日(土)	14 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
13	平成 14 年	1 月 19 日(土)	14 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
14	平成 14 年	2 月 16 日(土)	14 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
15	平成 14 年	3 月 3 日(土)	10 : 45 ~	市役所	(4 階会議室) * 中間報告会
16	平成 14 年	4 月 27 日(土)	10 : 00 ~	市役所	(研修室)
17	平成 14 年	6 月 16 日(日)	18 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
18	平成 14 年	7 月 28 日(土)	18 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
19	平成 14 年	8 月 25 日(日)	14 : 00 ~	千里市民センター	(大ホール)
20	平成 14 年	12 月 6 日(金)	19 : 00 ~	北千里地区公民館	(第 5 会議室)

[グループ会議ほか]

1	平成 13 年	6 月 25 日(月)	19 : 00 ~	第 5 グループ会議
2	平成 13 年	6 月 30 日(土)	18 : 00 ~	第 2 グループ会議
3	平成 13 年	7 月 27 日(金)	19 : 00 ~	代表者会議
4	平成 13 年	8 月 2 日(木)	19 : 00 ~	第 4 グループ会議
5	平成 13 年	9 月 10 日(月)	19 : 30 ~	第 4 グループ会議
6	平成 13 年	10 月 12 日(月)	19 : 30 ~	第 4 グループ会議
7	平成 13 年	11 月 1 日(木)	19 : 30 ~	第 3 グループ会議
8	平成 13 年	11 月 3 日(土)	18 : 00 ~	第 4 グループ会議
9	平成 13 年	11 月 8 日(木)	19 : 30 ~	第 3 グループ会議
10	平成 13 年	11 月 10 日(土)	14 : 00 ~	第 4 グループ会議
11	平成 13 年	12 月 9 日(日)	18 : 00 ~	第 4 グループ会議
12	平成 13 年	12 月 22 日(土)	18 : 00 ~	第 4 グループ会議
13	平成 14 年	1 月 14 日(月)	18 : 00 ~	第 3 グループ会議
14	平成 14 年	5 月 27 日(月)	18 : 30 ~	第 2 グループ会議
15	平成 14 年	6 月 28 日(金)	18 : 00 ~	第 1 回作業部会
16	平成 14 年	7 月 13 日(土)	18 : 00 ~	第 2 回作業部会
17	平成 14 年	8 月 19 日(月)	19 : 00 ~	第 3 回作業部会
18	平成 14 年	9 月 28 日(土)	18 : 00 ~	第 4 回作業部会
19	平成 14 年	10 月 26 日(土)	18 : 00 ~	第 5 回作業部会

= 委員名簿 =

伊丹 康二	全 京子	藤本 正知
伊場 克彦	染井 徹也	札場 治男
井畑 恵美	高橋 史郎	細田 捷代
伊吹 朋子	高増 文弥	細見 教
馬垣 安芳	竹内 恵子	堀 博
大野 充	竹内 忍一	増成 文子
岡村 昇二	田島 壽太郎	松田 智子
岡本 茂	立山 清弘	松永 典子
小川 千恵子	田中 慎造	松原 正人
片岡 誠	谷川 一二	三木 絹子
金丸 保鶴枝	田畑 外次	三崎 敬二
神谷 弘	千原 恵子	三澤 康彦
嘉本 正	椿本 尚右	宮川 武
北詰 澄子	輝尾 清	森田 正彦
木下 武	仲埜 ひろ	館 紀一
倉田 誠	夏原 章年	柳本 正春
古閑 雅子	仁木 みよ子	山田 江満子
小林 房子	西 公博	山本 涉
酒井 蔚聿	彦坂 利久	横山 高明
櫻山 輝世	広村 知幸	吉沢 豊吉
澤田 和加子	深谷 實	吉永 知之
清水 雅幸	福永 直義	和佐 厚子
杉本 貴美子	藤田 和則	(5 0 音順)
瀬屋 好治	藤本 輝夫	は委員長、 は副委員長

(報告書作成のための「作業部会」委員)

伊丹 康二	櫻山 輝世	彦坂 利久
伊場 克彦	高橋 史郎	藤本 輝夫
井畑 恵美	田島 壽太郎	館 紀一
岡村 昇二	谷川 一二	山田 江満子
片岡 誠	田畑 外次	(5 0 音順)
木下 武	椿本 尚右	は部会長、 は副部会長

「千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会報告書」

平成14年(2002年)12月25日

編集：千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会

[事務局：吹田市企画部政策推進室]

発行：吹田市企画部政策推進室

〒564-8550 吹田市泉町1丁目3番40号

TEL：06-6384-1231

FAX：06-6368-7343

e-mail：kikakubu@city.suita.osaka.jp